世界にどう発信するか—中国文学の焦燥[1]

呉 俊著・李光貞・康上賢淑（翻訳）[2,3]

一．世界とは何か？ どんな世界に発信するか？

「中国文学」と「世界」との関係を如何に判断・記述し、アプローチするか。この問題は近年の中国文学界における基本的視点や結論から、大まかに次の三点に要約できる。第一に、中国文学は「すでに世界に発信されている」。第二に、中国文学は「世界に向かう途上にある」。第三に、中国文学を「如何に世界に発信させていくか」。これらにはそれぞれ内容の是非に関係なく、暗黙の共通したイデオロギーの前提がある。

現在の中国文学と世界とは単なる文学的な関係ではなく、文学の価値判断に関わり、中国文学と世界との関係の度合いによって前者の価値を判断するようになっている。それと同時に、これらの三点には共通した心理的コンプレックスと複雑な心理状態が表れている。「中国文学を如何に世界に発信するか」ということは、中国文学にとって大きな関心事であり、ひいては焦りともなっている。——両者を結びつけながら、現代的な言い方をすれば、中国文学と世界との関係は中国文学の核心的な利益に大きく関連していると言わざるをえない。

これは明らかにマクロカテゴリーにおいて、中国文学にアプローチする際

1　本稿は中国の教育部哲学と社会科学研究重大課題プロジェクトによってできたものである。番号：10jzd0010。同時に2010年５月、北京師範大学で行われた「中国現代文学海外伝播研究国際シンポジウム」での発言稿でもある。同稿は中国経済に興味を持つ読者が、急拡大している中国市場と文学との関係の理解に少しでも役に立てば幸いである。

2　本訳稿は山东省社会科学规划研究项目：莫言文学在日本的翻译与研究（17CWWJ07）の階段的な成果である。

3　翻訳文の出所：中国当代文学海外传播研究，姚建彬主編，北京大学出版社2016年06月版。

の新しい言語的脈絡だと言えよう。

このアプローチは決められた範囲や際限に収めるため、まずは関係するキーワード（概念）を規制する必要がある。「中国文学」は字面から見れば簡単だが、実際には近代・現代・現時点の中国文学であり、さらに明確にするなら「文化大革命」以降のいわゆる新しい時期の中国文学を指している。明確な定義がある「中国文学」に対して、曖昧なのは「世界」が一体何かということである。

中国文学にとって世界とは一体何なのか。地球か全世界か。そこには中国が含まれているのか。この二つの質問に対する答えは、同義且つ反復であると同時に広すぎて限りがない。中国文学が世界へ向かう時、実際の地理的、空間的な範囲外の世界への輸出は、事実上は不可能だと思われる。当然ながら、どの国の文学であってもその可能性はない。世界には地域的な制限があるためである。もう一つの答えは現在、中国文学は世界の中に置かれているようだが、実際には西洋中心に対抗するという台詞が潜んでおり、中国の中国文学も実に世界という範囲内にあるという意味にすぎない。ただこの台詞はすでに中国文学を世界にどう発信するかという問題自体を解消したが、依然として強烈な文学的レトリックを失っていない。そのため「世界」が「消滅」する可能性があるため、もうこれ以上討論する意義もなくなり、討論もできなくなるであろう。

中国（文学だけでなく）を世界にどう発信するかという問題が生ずるのは、歴史的な根源があるといえる。例えば、その根源は清朝後半期、さらには明代の中国域外との交通に遡ることができる。ところが、歴史を考慮しても、多くの場合で現時点の焦燥感となっているのは、現在に特定の理由があるに違いない。その根源の生ずる理由を歴史の視点から見れば、中国と欧米間の力量と利益の衝突に原因があるとは言え、現在も大体同様な理由であることはほかならない。――私たちが「西洋中心説」を省察する際、西洋の覇権や強権としてそれをみなしている。しかし、「西洋中心説」という考えは少なくとも清朝後半期及び「五四運動」時代に中国のエリートや有識者たちから、

正当性と正確さを得ているのである。また、その理由はどうであれ、遺産として認識し認可されている。そうでなければ「世界にどう発信するか」という問題が生ずることはない。したがって、「世界」に対する自明の実証的理解、そして中国のコンテクストにおける世界の実際または真実的意味は、常に欧米を中心とする世界観だといえる。これを踏まえてできた基本的な目標は、欧米列強と肩を並べ世界での地位を得ることとなる。この世界観が絶対に正しいかどうかは言い難いが、それに伴って形成された課題や困難は、中国が世界に発信する際の障害となっているのも明らかである。

中国文学を世界に積極的に発信するという現時点の話題を論ずれば、前に述べたように、それは事実上の判断に関わってくるだけではなく、また主に（或いは潜在的に）価値判断が含まれてくる。世界に発信する際に、中国文学は欧米の文学価値を参考基準にして発信するのか、それとも、後者は支持を余儀なくされ、異質な中国文学の価値を包容しなければならないのか。文学価値は当然同質ではあるが、その同質性についてはここで討論する必要もないし、もし同質性に焦点を合わせれば、中国文学を世界に発信する際にもたらされる焦燥感という問題は成立しないであろう。中国文学の価値の異質性が鮮明にされた時にこの問題は明らかになり、中国文学の価値の独自性が最も顕著になる。そこには挑戦と困難があり、この挑戦と困難をなくさなければ、その障害は必ず中国文学といわゆる世界に長く横たわることになる。

即ち、中国文学を世界にどう発信するかという問題が実際の問題となったら、これからも続いていくと思われる。実はこの問題はすでにほぼ100年以上存在しており、現在の焦燥感は同じ問題としてまた継続していくのである。もし中国文学と世界との関係が中国文学の価値や地位、または中国文学の核心的利益に関連するならば、中国文学の価値や地位および核心的利益はこうした判断のなかでは、少なくとも明確になってないし曖昧さに満ちているのである。——これこそが我々と中国文学が焦燥する原因でもある。ただ、多くの場合はそれを正視したり、受け入れたり、手放そうとしたりしようとしないだけである。

この焦燥感に対して、世界を単純な概念や純度の高いシンボルとして、ひいては単に音声ロジックのユートピアとして期待するだけで、実行にしないという対応法もあるが、このようにすれば、我々も同様に世界に発信するという真の言語的脈絡を得ることができる。

二. 海外研究：世界（文学）としての中国（文学）

角度を変えて見れば、世界にはいわゆる不確実性と多義性があっても、中国文学の世界（文学）資源としての真実性や使用価値を妨げることはできない。つまり、中国文学は世界に流通する実際の交換機能を有している。

ドイツの中国文学者クービン（Wolfgang Kubin）教授のケースが挙げられる。私はもともとクービン氏が中国国内だけで論争の的になっている人物だと思っていた。それは彼の中国現代文学を全部「ごみ」だとする「ゴミ論」とか、中国現代文学のレベルが低いのは中国人作家が外国語をわからないためだという奇怪で「不条理」な話による。そこで、クービン氏は中国文学を研究できる学術能力があるかどうかという疑惑が出てきたのである。さらに彼のいわゆる西洋帝国主義のイデオロギーを厳しく批判する中国人学者も現れた。また、最後に意地になったような質問まであった。「中国の現代文学をこれほど軽蔑しているのに、なぜ中国文学を研究するのか」。他のことは別にしても、この最後の疑問こそ意外に問題の本質、つまり海外の学者はなぜ中国の文学を研究するのか、についているのである。

私は直接この問いに答えられないし、他の答えを逐一求めることもできない。しかし、別のルートに沿って、この問題を直視することができる。私はクービン氏が中国の文学界を混乱させているときに、海外の中国文学研究サークルでも問題の人物になっていることを意外にも知って驚いた。海外での波乱は中国国内のように激しいものではなく、ただ中国の余波にすぎない、中国にフィードバックされたものであろう。これは非常に興味深いサイクルである。近年、私は日本・アメリカ・欧州（ドイツを含む）の中国文学研究者にクービンの中国文学研究をどう見るかと何回か聞いてみたところ、

予想通りの外交レトリックのほかに、クービン氏の「情け容赦ない議論」のような中国文学研究へのコメントに、ほとんど誰もが明らかな軽蔑だと反対を示した。——中国の学者と同様に、これら海外の学者もクービン氏の言論の真相を究明しようとしない。彼らの情報源が主に中国におけるクービン氏への反応あるいは反感から来ていることと深く関わっているのが、その理由の一部かもしれない。さらに困惑している学者もいるし、立腹している学者もいる。「なぜ中国人学者はこんなにクービンに熱くなっているのか。彼は海外では学術的地位がなく、全く知られていない」。私個人の直接的な出会いは、あるシンポジウムでクービン氏と夏志清氏の両者の影響力の比較研究というテーマで発言しようとした際に、「クービン氏を夏志清氏と比較できるのか」と質問された時である。——その質問者は実は私の講演原稿をまだ読んでいなかった。発表内容はもう重要ではなくなり、なぜその内容を話したいのかという態度やモチベーションが最も探求価値を持つようになった。

現在のところ、いわゆる中国文学研究界は僅かではあるが数ヶ国にあるので、クービン氏が欧米の中国文学研究界で知られていないはずはなく、そうした言い方は一種の極度的で感情的な言葉にすぎないのである。クービン氏の学術的存在を否定することが目的ではなく、むしろクービン氏の中国での人気やスターのような脚光を浴びていたことへの「嫉妬心」によるものというのが適当であろう。そして、この「嫉妬心」ムードの裏には、わずかに言外の意を漏らしている。クービン氏には海外の中国文学研究のレベルを代表する資格はなく、それは「我々」だということである。

「中国の台頭」という現実により、海外における中国研究は、もはや国別の「文学」研究の意義に限定されなくなり、「文学」は海外の学者の中国トピックに関連するルートの一つになっている。そのルートによって得られるのは中国をめぐる話題・課題そして中国研究の国際的な世論の主導権などだと言えよう。従来のやり方とは違って、「聳え立つ中国」から、その主導権を授けられたり、認可されたり、命名されたりしている。海外の学者がもつクービン氏への不満或いはその本意は、むしろ中国文学界を「濫用」してい

ることへの不満といっても過言ではない。――つまり、クービン氏一人が中国文学の国際利益を「独占」すべき問題ではなく、むしろ独占することはできないというものである。海外の中国（文学）研究界において、研究をめぐる激しい対局が感じとれる。

海外の中国研究の原始資源と基本資源が中国からということには疑問がない。お互いの関係でいえば、過去の中国は多くの場合、ただ受け身的に静観的に研究されたという状態であった。例えば、夏志清氏の「中国現代小説史」のような研究は、中国に焦点をあわせて生まれたが、中国文学界は最初の十数年間は反応らしいものを少しもみせなかった。改革開放後に中国の国際的な反応が見られ、徐々に積極的かつ意識的になり、海外の中国研究も多くのフィードバックを示してきた。また、このフィードバックはかなり有力で、海外における具体的な中国関連の研究分野での国際的地位にまで影響力が波及している。夏志清氏著の「中国現代小説史」が中国で「古典」として認められるようになったのは、ある程度、夏氏著の最終的な地位が確立し、完成したと理解できる。そこから下記の事実がみえてくる：もともと資源・研究対象としての中国現代文学は身分がかわり、対話者・相互作用者・ステークホルダー、または単に世論の主導者と批判的権威者など複数のアイデンティティを持つようになって、海外における中国文学研究界の力量と関心のパターンに深く影響するようになった。海外の中国研究者は中国を単に資源対象とするのに満足しなくなり、さらに中国からの応答や肯定的なサポートを得ることを目標とするようになった。また後者は最も重要で現実的な資源として大いに重要視されはじめたのである。この意味では、クービン氏は間違いなくこの10～20年間で最も成功した海外の中国文学研究者の一人だとみる。木が大きくなれば風当たりも強くなるように、彼の予想外の遭遇にあうのは無理もないことであろう。

当然のことであるが、これは、海外の中国研究が純粋でまたは完全に実利的な動機であることを意味することではない。しかし、中国文学は世界におけるリアルコンテキストの主導権を持っている事実は否めなく、中国という

概念は、すでに現代性と国際性に溢れたコスモポリタンを持つようになっている。この（文学的な）リアルコンテキストは必然的に海外の中国（文学）研究に関する中心力や利益的関心に影響を与え、最後は中国文学の海外伝播や研究に大いに影響するような結果にまでなっているのである。中国からの反応があるかどうかは海外の中国文学研究者に大きな影響があり、研究地位にまで影響を及ぼしている。中国カードを手に握っていれば、多くの場で勝ち負けを決めることができる。このカードは多く握れば握るほどよいと誰しも思っている。

海外の中国現代文学研究のこうした現状から見れば、中国現代文学がすでに世界進出したと判断できないのに対して、判断できるのは中国文学には特定の価値機能や使用用途があることである。例えて言えば、「中国製」は世界に進出しており、世界の隅々まで広がっている。しかし、「中国製」として価値のステータスをどのように判断するのか？ 中国文学の世界進出への価値と、日常用品としての靴やズボンなどの「中国製」との価値の違いはどこにあるか。中国（文学）の世界的な地位の変化は中国が「中国製」を持っているように、ある程度、海外（文学）研究界の不安や焦燥感を招き、クービン氏が「攻撃された」のもその不安の一種の屈折であり、その証拠の一つでもある。しかし、中国文学に対する受け止め方を見たところ、不安や焦燥感があり、今でもなくなるどころか、世界へと向かう途中に増強し深刻化してきている：「世界」はどのように私たち（中国現代文学）を見ているか。これまでになく気を配り、非常に敏感になっている。だからこそ、我々はクービン氏の「ゴミ論」に大きな反応を示したのである。最終的には、中国文学が世界文学として、その地位が世界的に認可され、世界にどう発信するかということがもう問題ではなくなってから初めて、その焦燥感は最終的に解き放たれるのであろう。

* 本稿は唐亜明先生・福ケ迫加那先生より多大な協力をいただいたことに、感謝の意を表す。

作者略歴：

李光貞（1962～）、中国・山東省済南の生まれ、文学博士。現在は山東師範大学外国語学院教授。Email:2590632273@qq.com

研究分野：比較文学、日本文学と翻訳、外国文学解読と文学教育

代表的な成果：

共著：『中国における日本近現代文学の受容』中訳出版社、2017、06。

独著：『夏目漱石小説研究』外語教学与研究出版社、2007、08。

論文１：「莫言文学在日本的接受史及其意义」复旦外国语言文学论丛、2018年春季号。

論文２：「中日两国黑岛传治反战文学研究述评」山东师范大学学报、2017年第４期。